

## <卒業論文概要>

### 子育てにおける母親と父親の性別役割分業に関する研究 —ジェンダー観の変化を促す学習に着目して—

金田葵\*

#### 1. 本研究の目的と方法

1970年代の性役割の問い直しが議論される中、1975年に女性自身が女性について学ぶ女性問題学習が生まれる。その後、女性問題と男性問題が表裏一体であることを男性の側が考える機会として男性改造講座が1990年頃から生まれた。その機運が高まる中、1999年に男女共同参画社会基本法が制定された。その理念は、仕事と家庭に男女とも参画する、一人の人間として自らの生き方を尊重するというものである。しかし、日本のジェンダー・ギャップ指数はOECDの最下位である。男女の不平等はまだ多くの課題がある。先行研究において、企業の雇用管理が性別役割分業を前提としているため、こうした体制に組み込まれる労働者・家族はそれに起因する生きづらさを感じていると指摘されている(中藤、2005)。また、人は親となった際、自らの両親をロールモデルとすることや、婚姻から妊娠・出産、さらに子育て期に至る過程で異性観がそのまま母親役割・父親役割に移行することにより、性別役割分業とジェンダー観が再生産されているという(山田、2002)。これらを前提とした「ジェンダー規範がもたらす生きづらさを解消する方法」については多数の言説がありながらも、その検証は十分とは言えない。

本研究では、母親及びその夫である父親を通じて、「調査対象者の現状と逆の立場にいることを想定した発話をするにより学習が想起される」という方策の適格性を問う実践を行う。つまり、「『学習』により『性別役割分業観』は変容するのか」について研究することが本研究の目的である。また、親たちは自らの子育てとキャリアの問題について、苦悩する現状がある。男女共同参画社会の一員である一人の人間として生き方を選択する自由を保持しながらも、家族がいることにより単独では判断できない問題として解決しなければならないために苦悩するのである。本研究の最終的な目的は、その現状を解決するために彼・彼女らの学習の方法を提示することである。

#### 2. 構成

- 序章 問題の所在と本研究の目的
- 第1章 ジェンダー規範、母親・父親の学習実践、子育ての関連政策と先行研究の検討
- 第2章 「学習」の定義との蓄積
- 第3章 実践の計画と手続き、その結果
- 終章 本研究のまとめと課題

#### 3. 概要

第1章では、戦後日本の男女の平等に関する政策の歴史的展開を整理し、「日本における労働社会構造の変化と、家族やその子育ての在り方がどのように影響しあっているのか」を明らかにした。そして、母親・父親を取り巻く日本の労働社会構造の家族・家庭に大きな影響を与えていることを指摘した。

第2章では、第1章で検討した戦後の労働・家庭環境の変化と性別役割分業の問題をめ

---

\* 筑波大学 人間学群 教育学類4年

ぐって社会教育施設において、どのような学習実践が展開されてきたのかについて、国立市公民館での公民館保育室の設置や女性問題学習、男性改造講座等の実践について検討した。

第3章では、「相互理解」「母親・父親の学習」の分析の視点に基づいて行った実践の計画と手続き、その結果を示した。その結果以下の3点が浮かび上がってきた。1点目は性別役割分業をめぐる意識が親子あるいは家族のあいだで再生産されていることである。最も身近な家庭という場において、子どもは両親の生き方や両親と家族との関係性を敏感に読み解きながら、性別役割や自らの生き方を「選択」している様子がうかがえた。2点目は、「労働社会構造」というすぐには変えられない現実の中で、労働者である親たち、それを支える専業主婦たちが自らの生き方を合わせるしかない構造が存在することである。そうした構造の中で、母親たちは専業主婦になるということを「選択」するわけであるが、自分の意思の及ばない企業の論理に、自分の生き方が絡めとられていくことに対して、葛藤を抱えていることも窺えた。3点目は、「性別役割分業」そのものに対しては「古い考え方」という否定的な意見が多くみられたものの、一部で肯定的な語りも見られたことである。それは生物学的に規定された女性としての性を、家事や育児という性別役割分業にも発展させたものとして捉える考え方が、女性の内面にも醸成されていることを意味している。

#### 4. 主要参考文献

- ・池谷美衣子、富永貴公「女性たちが学ぶことの今日的な意味：国立市公民館における女性講座参加者の経験から」『社会教育学研究』第54巻、2018年、pp.13-23
- ・上田孝典「地域づくりにおける公民館の役割—つくば市における乳幼児家庭教育学級の実践を事例に—」日本社会教育学会編『日本の社会教育』第63集、東洋出版社、2019年、pp.181-194
- ・大日向雅美『母性愛神話の罨』日本評論社、2000年